

第2章 京都大学総合人間学部構内 AR24 区の発掘調査

伊藤淳史 富井 眞

1 調査の概要

今回の調査地点は、総合人間学部構内の北端に位置する（図版1-249）。1995～1996年にかけて校舎新営にともなう発掘調査を実施した238地点の周辺隣接地にあたり、付随工事等によりあらたに掘削される部分330㎡について、1996年3月21日～4月17日に調査をおこなった。調査区は東西に分かれているため、報告にあたっては、それぞれ「東調査区」「西調査区」と呼ぶ（図1）。

先行して実施された238地点の調査（以下「前回調査」とする）では、弥生時代前期の土器棺墓の可能性の高い遺構、奈良時代の土器溜、平安～鎌倉時代の溝群、室町時代の直角に曲がるコーナー部分を持つ大溝や井戸、近世の柵列や野壺群など、各期の遺構と多量の遺物出土をみており、一帯が長期にわたり利用され続けた空間であった様子が明らかとなっている〔伊藤2000〕。今回の調査でも、同様な時間幅の遺物が整理箱12箱分出土したほか、前回調査ではみられなかった中世の掘立柱建物跡や多量の銭貨をとまなう集石土坑など、小面積ながら重要な遺構が複数発見されており、調査地一帯の遺跡としての重要性を示す情報がいっそう充実する成果が得られたといえる。

なお現地調査と整理作業は伊藤淳史と富井眞が担当し、下坂澄子・土井明子・菅野類・安見昌幸の助力を得た。本章の執筆は、おもに東調査区に関しては伊藤が、西調査区に関しては富井が分担し、伊藤が全体を調整した。

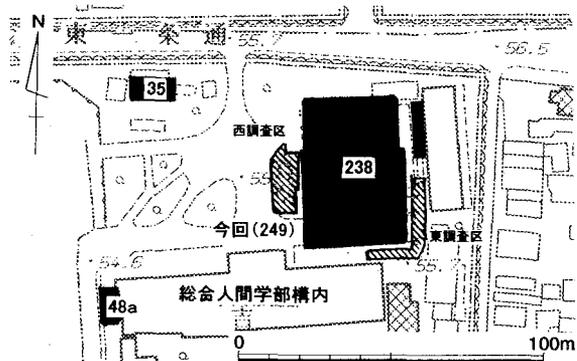


図1 調査区の位置 縮尺1/2500

2 層 位

西調査区は西壁，東調査区は南壁の層位を示す（図2）。

西調査区の灰褐色土（第2a層）は，厚さ50cm前後に達する砂質の脆い層。細かな違いから3層に分層可能だが，遺物の内容に変化はなく，一括した。前回調査の所見を参考にすると，この層のほとんどは，明治30（1897）年の調査地への第三高等学校移転にともなう埋め立て整地上とみられる。茶褐色土（第3層）は，平安時代～室町時代の遺物包含層で，北方へ向かうほど堆積が薄くなる。また，場所により暗茶褐色～淡褐色に色調が漸移的な変化をみせる。黄褐色砂質土（第4層）と白色砂礫（第5層）は，ともに無遺物で基盤層となるものである。

東調査区の灰褐色土（第2b層）は，近世の遺物包含層だが，厚みに乏しく，堅く締まる。近代に上面を削平され，それらが西調査区2a層にみるような埋め立て土に用いられたと推察される。暗茶褐色土（第3層）は，中世土師器の細片を含み，堅く締まるが，安定して存在していない。黒褐色土（第4層）は，基本は奈良時代と弥生前期の遺物包含層だが，一部中世の遺物も混じる。弥生前期の遺物包含層が奈良時代や中世に搅拌されたものと判断される。黄褐色砂質土以下は無遺物で，西調査区と共通する。

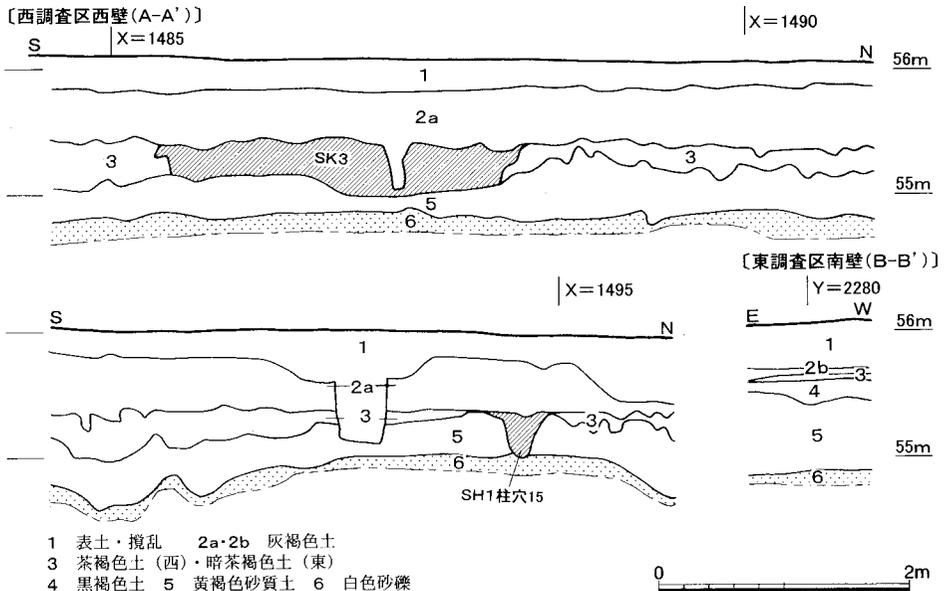


図2 調査区の層位 縮尺1/60

3 遺 構

東・西両調査区の遺構を図3にまとめて表示した。以下、時期・調査区毎に説明する。
なお縄文時代晩期以前については、土器の出土のみで、遺構はない。

(1) 弥生時代前期の遺構 (図版2, 図3)

東調査区の遺構 弥生時代の遺構の多くは、黒褐色土の堆積するこの調査区で検出されている。SK8は、調査区西壁際で見つかった2mを越える大きさの不定形な土坑で、調査区外へとつづいている。地山の黄褐色砂質土上面で検出され、それを30cm程度掘り込んでいたが、一帯の黒褐色土中からも弥生土器片がまとまって出土しており、本来はそれ以上の深さの土坑であったとみられる。また、このSK8の底面で浅い南北方向の溝状遺構が検出され、埋土より弥生土器小片が出土したため、これをSD9として区別した。

SK9は、径1m程度の円形の土坑で、深さ20cm程度、底は平らである。壺の大破片(I31)をはじめ、比較のおおぶりの土器片が複数出土している。

SK10は、長さ2m幅80cmの楕円形の土坑で、検出面からの深さは60cm。上面の一部を古代の溝SD10に破壊される。埋土中から少量の弥生土器片が出土した。

西調査区の遺構 明確に確認できた遺構はSK4のみであるが、中世の包含層中から多数の弥生土器片が得られており、歴史時代以降に削平されている可能性が高い。

SK4は、径50cm程度の浅い円形土坑で、淡茶褐色土を埋土とする。前期の甕(I7)が一括出土し、それ以外の時期のものを含まないため、この時期の遺構と判断した。

(2) 古代以降の遺構 (図版3, 図3・4)

東調査区の遺構 奈良時代の不定形土坑、平安時代の溝、室町時代の円形土坑がある。

SP251~253・256~261は、いずれも黒褐色土を埋土とするさまざまな規模の不定形土坑で、奈良時代ころに比定できる土器片の出土をみた。検出面からの深さは30cm前後だが、輪郭不明瞭なものが多い。SP254・255・262は、埋土からの出土遺物が無いため決め手を欠くが、埋土や形状の特徴が共通しており、同時期に属する可能性がある。

SD10は、方位を10度ほど西に振る南北方向の小溝で、幅60cm深さ25cm程度の断面U字形を呈し、黒褐色土を埋土とする。出土遺物から9世紀代に下る遺構とみられる。

SE1は、黒褐色土上面で検出された径1m深さ40cmほどの円形土坑で、淡灰褐色土を埋土とする。15世紀代に下る土師器が出土している。形状から野壺と判断して遺構番号を付したが、それ以外に決め手となる痕跡は認められなかった。

京都大学総合人間学部構内 AR24 区の発掘調査

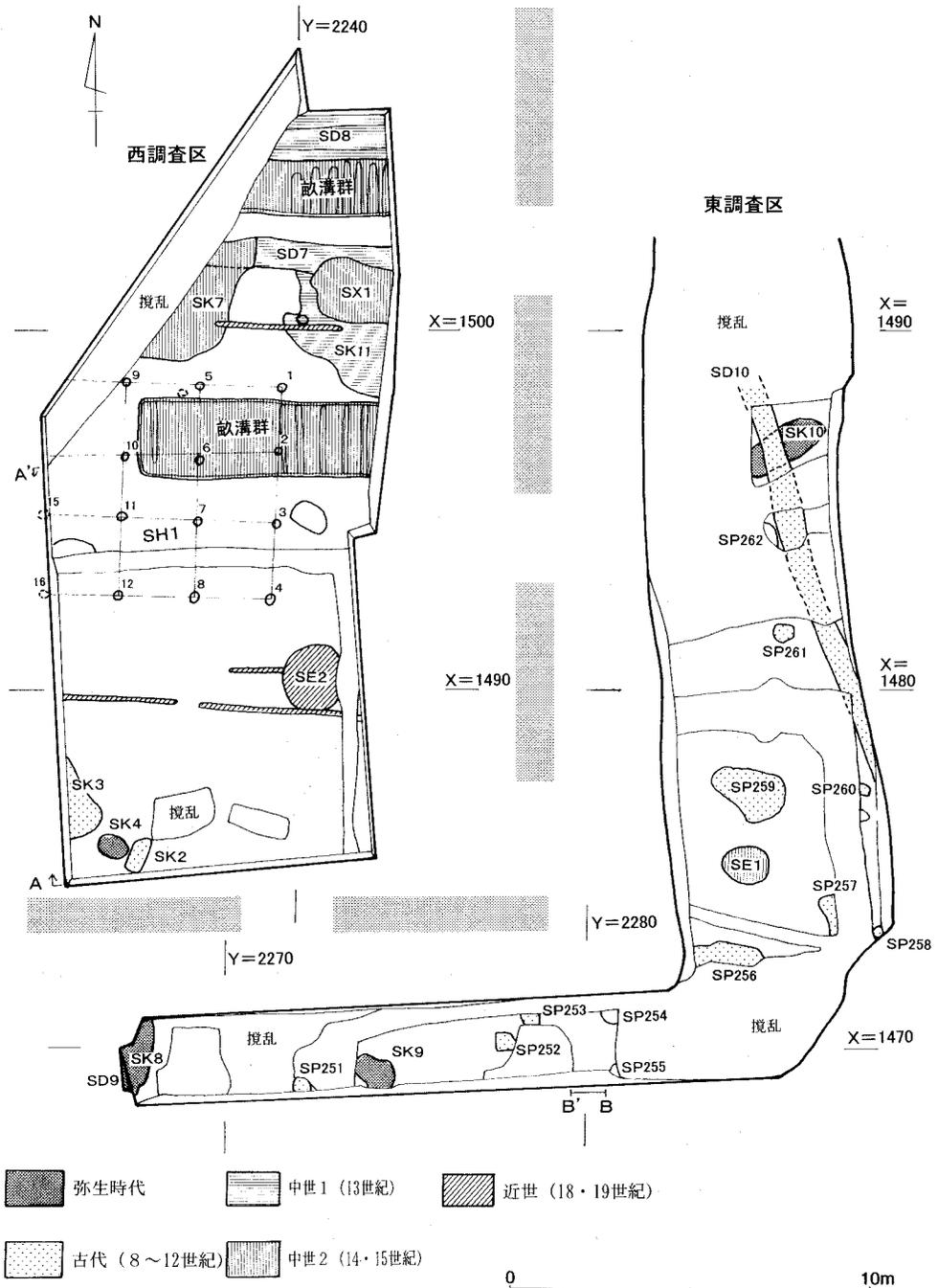


図3 調査区検出の遺構 縮尺1/200

遺 構

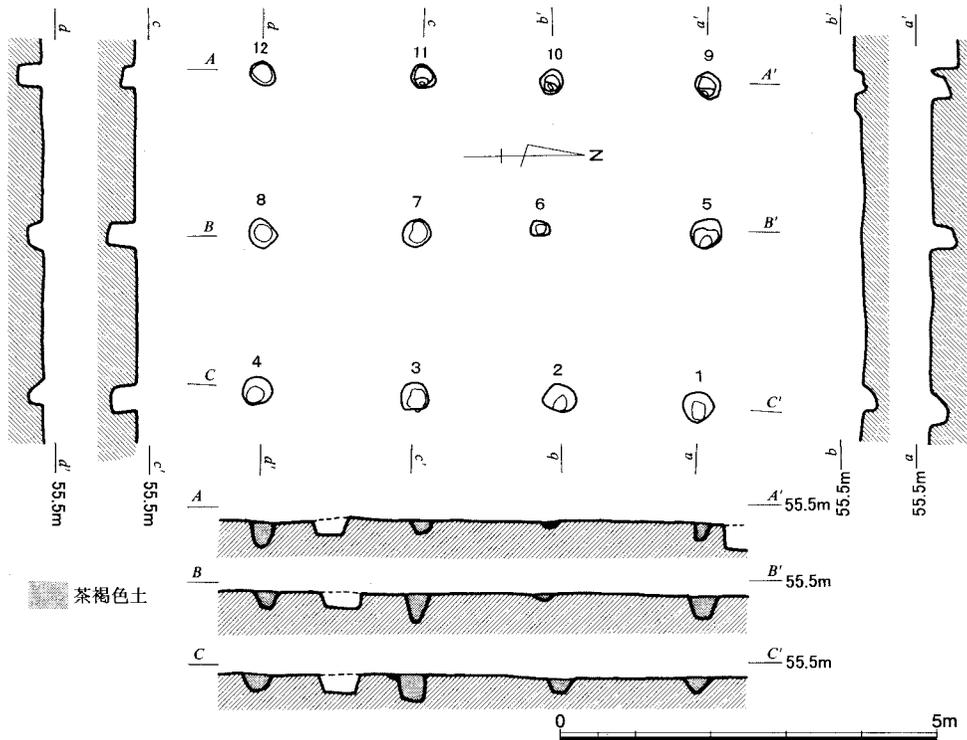


図4 中世の掘立柱建物跡 SH1 縮尺1/100

西調査区の遺構 古代の土坑、中世の建物・溝・土坑、近世の野壺・溝・杭列などを検出した。SK2・SK3・SK11は11世紀の土師器片を多く含む土坑である。中世の遺構は調査区北半に集中する。掘立柱建物跡 SH1は南北3間の総柱建物で、東西は現状で3間までは確認している(図4)。柱間は2mで一定しているが、柱穴底面のレベルは30cm以上の幅をもつ。柱穴埋土は単一層で礎石や添石は認められず共伴遺物も乏しい。中世後半の瓦をともなった。SH1の北半を切るかたちで南北方向に長さ2~3mで短冊状に展開する畝溝群を検出した。同様のものは調査区北辺にも見られる。前回調査で確認されている南北二つの畝溝群に連なる。この二つの畝溝群にはさまれたところに土坑2基(SX1・SK7)と東西溝を検出した。集石土坑SX1は拳大の礫からなり、銭貨が散乱していた。14~15世紀であろう。不定形土坑SK7もほぼ同時期と思われる。これらの土坑に切られる溝SD7は、平安時代中期・後期の瓦を含むが、最終埋没時期は鎌倉時代である。これに並行して北をはしる溝SD8も同時期で、前回調査SD33の続きである。

近世では、野壺SE2は18世紀ごろか。溝と杭列は調査区全面を東西方向にはしる。

4 遺 物

(1) 縄文・弥生時代の遺物 (図版 4, 図 5～7)

東調査区の黒褐色土を中心に、東西両調査区から多数の土器が出土している。ここでは、時代および種類ごとに呈示し、出土調査区や遺構については適宜述べる。出土遺構に言及しない資料は、古代以降の遺構や包含層からの混在出土品である。

縄文時代の土器 (I 1～I 9) I 1・I 2・I 4・I 5が西調査区、それ以外が東調査区で、I 3・I 9は弥生前期の土坑 SK10 から、I 6・I 7は黒褐色土からの出土。

I 1～I 3は曲線や渦巻き状の沈線文様が施されたもの。I 1は波状口縁の部分で、器壁は厚く、太い棒状工具による刺突と沈線が認められる。I 4は縦位の LR 縄文が帯状にはしる胴部破片。I 5・I 6は粗製深鉢の口縁部片。I 5は内外とも横位の条痕調整して、口唇部を丸く収める。I 6は外面のみ条痕調整で、端部を面取りする。I 7は外面に横位条痕をもつ破片で、粗製深鉢の頸胴部付近だろう。以上は、有文土器が中期末に、粗製土器はおおむね後期に属するものだろう。

I 8・I 9は強く外反する口縁部で、内外とも条痕調整され、口唇部に O 字状の押捺がある。I 8は外面に厚く煤が付着している。いずれも晩期なかごろの深鉢口縁であろう。

弥生時代前期の土器 (I 10～I 53) I 16・I 18・I 21・I 31・I 35～I 38・I 40・I 45・I 46・I 50が西調査区、それ以外が東調査区の出土。I 16・I 37・I 38が SK4, I 10～I 13・I 17・I 32・I 33・I 43・I 44・I 53が SK8, I 19・I 26・I 28・I 48が

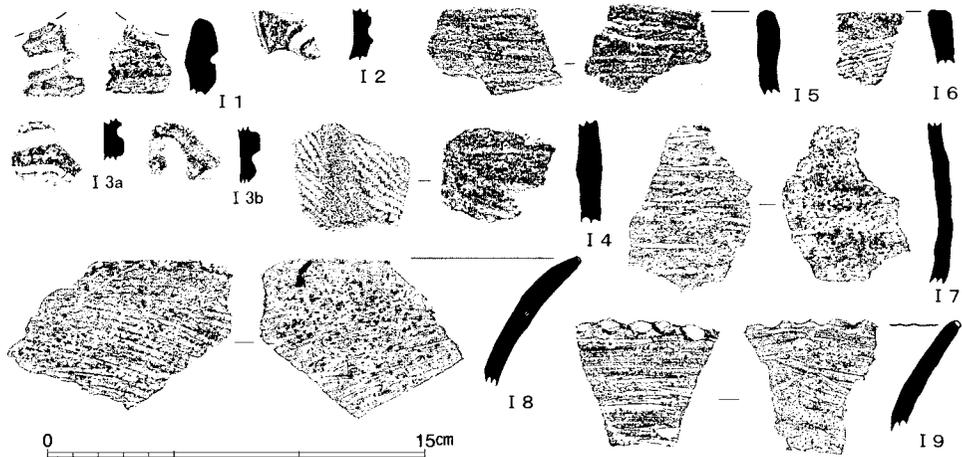


図 5 縄文時代の土器 縮尺 1/3

遺 物

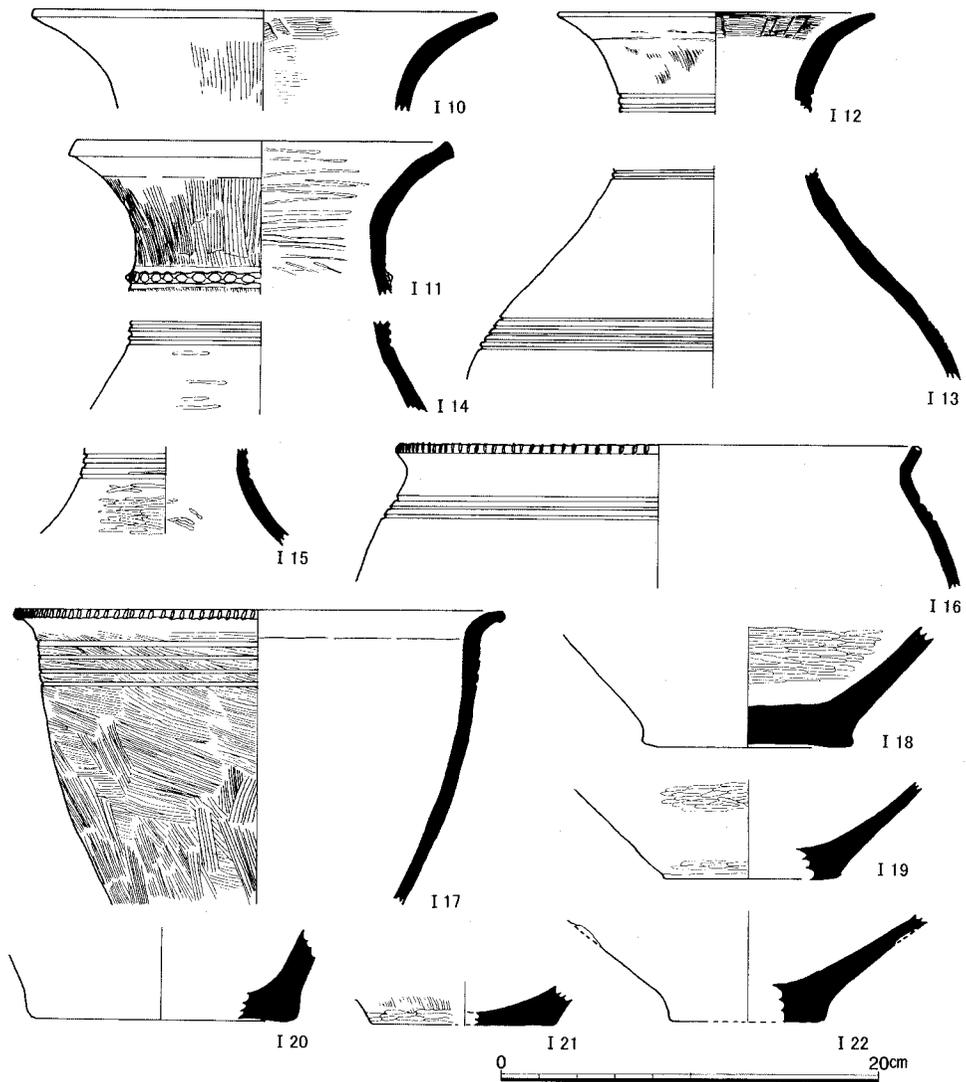


図6 弥生時代の土器(1) 縮尺1/4

SK8 周辺の黒褐色土，I 22が SK9，I 24・I 51が SK10，I 15が SD9，I 14・I 23・I 25・I 29・I 30・I 34が黒褐色土からの出土である。

I 10～I 15・I 23～I 43は壺。総じて、この時期に通有の篋磨きによる器表面の仕上げが簡略化されている傾向がうかがえ、刷毛目調整をそのまま残す個体も目立つ。口縁部は、いずれも強く外反する形態で、I 23～I 26のように端部に装飾をもつものがある。I 23は篋描沈線と刻みを組み合わせており、I 24は木目のみられる工具先端を用いて羽状に刺突

する。また、I 26は刷毛目調整と同じ工具を押し引きする特異な装飾である。頸部と胴部については、多条の篋描沈線文をめぐらす装飾が主体であり、I 30では9条まで確認される。それ以外では、削出突帯1点、貼付突帯2点がある。I 37は唯一の削出突帯例で、2条の篋描沈線に挟まれた部分の上下側を磨いて低めることによって突帯を造出する。突帯上は磨かれなないので刷毛目が残る。I 11・I 41は貼付突帯をもつ例。I 11は、指頭で押捺した細くこぶりな突帯が頸部に1帯めぐり、その上下に、突帯を貼り付けた際の横撫で痕も幅広く残る。I 41は胴部上半の小片で、突帯上に浅いV字状の刻みが施されている。なお、I 12の口縁～頸部とI 13の頸部～胴部は、同一個体となる可能性がある。

I 16・I 17・I 44～I 53は甕ないし鉢。I 16は口縁部が短く「く」字状に外反し、胴部が強く張る形態で、口縁端部にV字状の刻み、頸部に3条の沈線を施す。器表面は、内外両面とも撫でて平滑にされている。I 17は口縁部が強く外反し、胴部が張らない形態で、口縁端部にV字状の刻み、頸部に4条の沈線を施す。外面は、斜方向の浅い刷毛目調整で全面を仕上げしており、一部に薄く煤が付着する。内面は撫でて平滑にされる。I 44～I 53は口縁～頸部にかけての破片で、外面を刷毛目調整し、頸部に沈線をもつものが主体となる。沈線装飾をもたないI 45・I 46は鉢であった可能性が高い。

I 18～I 22は底部。いずれも器壁が厚手で、外面は磨きや撫で調整により平滑にしている。こうした特徴と、底部から胴部にかけての立ち上がりの角度を考慮すると、これらはいずれも壺の底部であるとみられる。

以上の弥生土器は、前回調査の出土資料とほぼ同内容であり、前期新段階の特徴をもつものがまとまっている資料といえる。とくに、口縁部の強い外反や端面の装飾、沈線の著しい多条化といった特徴を考慮すると、新段階でも後半期に位置づけられるものだろう。

(2) 古代以降の遺物 (図版5, 図8～11)

東調査区の出土遺物 出土量が少ないため種類毎にまとめる。それぞれ、I 58・I 60がSD10, I 62がSP261, I 68・I 70がSE1, I 54～I 57・I 59・I 61・I 63～I 65・I 67・I 69が黒褐色土, I 66・I 71・I 72が暗茶褐色土の出土である。

I 54～I 58・I 64は奈良時代の土師器。I 54は杯で、口縁周辺は強く横撫でし、端部を短く内側に巻き込む。外面下半は篋削りするが、縦位の叩き痕がのこる。I 55も杯だが、丸みを持って立ち上がる口縁で、端部は短く内側に巻き込む。内面の全面と口縁周辺は横撫で、外面は手持ちの撫で。口縁の内面側に一部煤が付着する。I 56～I 58は椀。I 56・I 57は外面に手持ち篋削り痕がみられるが、I 58は撫で調整で仕上げられる。I 64は製塩

遺物

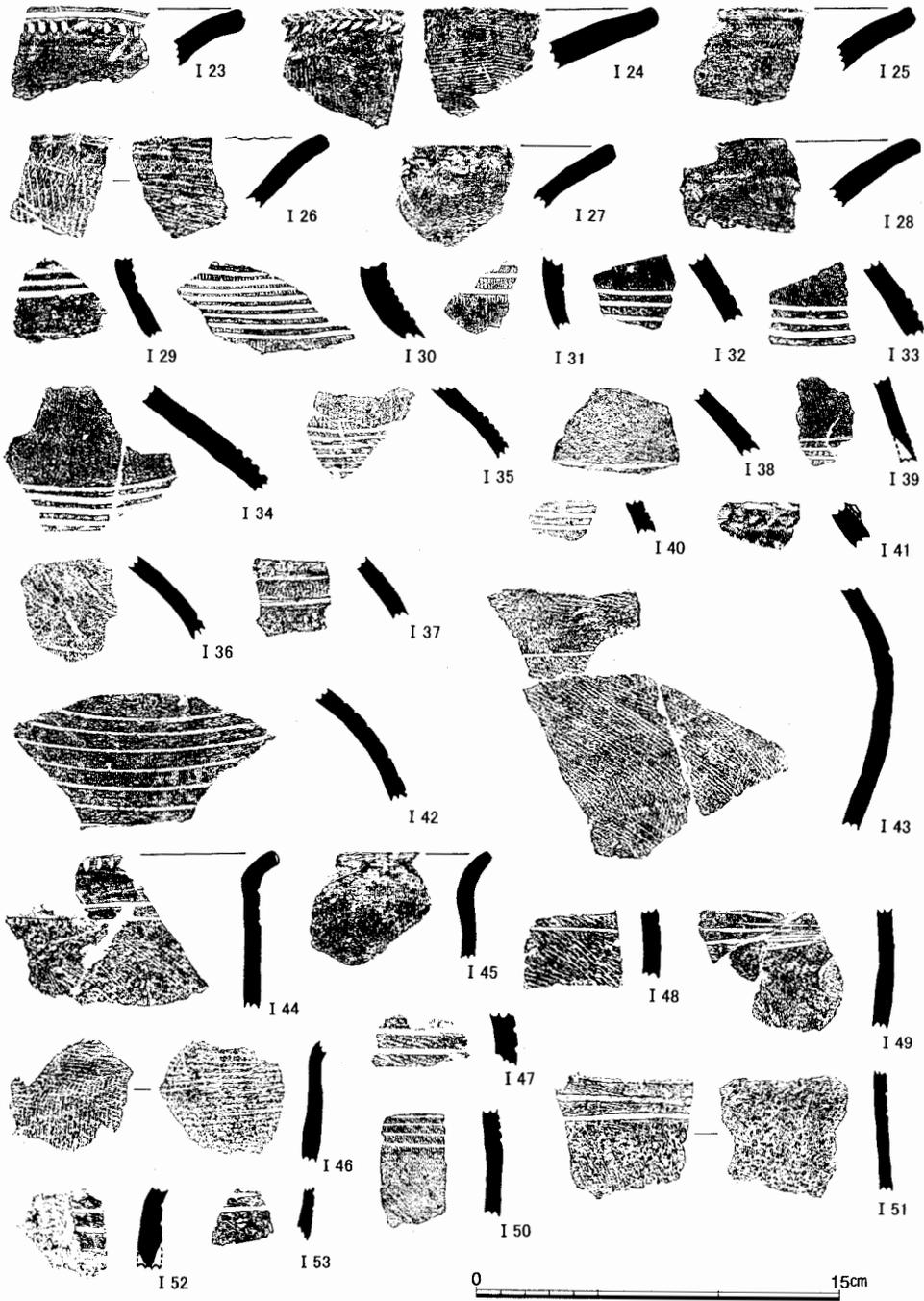


図7 弥生時代の土器(2) 縮尺1/3

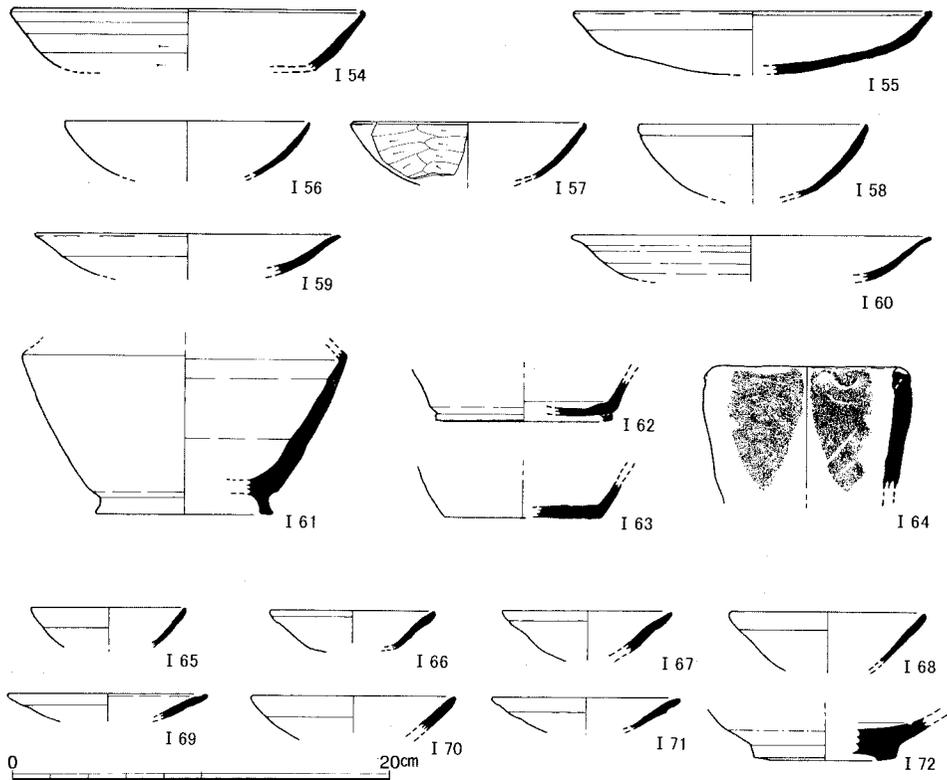


図 8 東調査区出土古代・中世遺物 (I 54~I 58・I 64・I 65~I 71土師器, I 59緑釉陶器, I 60灰釉陶器, I 61~I 63須恵器, I 72白磁)

土器。大粒の石英粒を含む粗い胎土で、器壁は厚い。内面は撫でて仕上げる。

I 59は精良な灰白色の胎土の皿形の土器。口縁周辺は強く横撫でされ、下半は内外面とも篋磨きされる。古代の施釉陶器の素地ないし釉の剝落したものかとみられる。I 60は灰釉陶器皿。口縁がわずかに外反する器形で、内面に薄く刷毛塗りされた釉が残る。9世紀代に比定される。

I 61~I 63は須恵器の底部。I 61は壺, I 62・I 63は杯であろう。I 61・I 62には、外側に踏ん張るように高台が貼り付けられる。おおむね奈良時代に属するものだろう。

I 65~I 71は中世後半期の土師器。I 65・I 69~I 71は赤褐色を呈する小形の皿A Iで、口縁部形態はそれぞれE類, F類, F類, F類。I 66~I 68は、灰白色を呈するいわゆる凹み底小椀。I 72は白磁椀の底部で、内面のみ施釉し、見込みに一条圈線をもつ。

西調査区の出土遺物 遺構毎に述べる。軒瓦の分類は前回調査に準じた。

遺 物

SK3 出土遺物 (I 73~I 75) いずれも土師器皿で、淡橙色ないし橙褐色を呈する。I 73は「て」字状口縁手法B₃類。I 74も「て」字状口縁手法でB₃類、I 75は2段撫で手法C₃類。これらの遺物からこの遺構の年代は、11世紀なかごろと思われる。

SK11 出土遺物 (I 76~I 86) I 76~I 81は淡橙色ないし橙褐色を呈する土師器。I 76~I 80は皿。I 76とI 77は、それぞれ「て」字状口縁手法B₃類とB₄類、I 78とI 79は2段撫で手法C₃類、I 80は1段撫で面取り手法D₃類である。I 81は口径約9cmの受皿。I 82は楠葉型の瓦器椀。I 83は須恵器甕。口縁端部を欠く。I 84は須恵器杯底部。円盤状の高台をもつ。I 85は外区に珠文が密に巡る軒丸瓦。内区は蓮華文と思われるけれども不明瞭。I 86は中房に蓮子をもち複弁四葉蓮華文軒丸瓦。KCM2A。瓦当裏面の紋りをもつ布目痕が特徴的である。これらの軒丸瓦は平安中期に比定されよう。以上、10世紀にさかのぼる遺物も含むものの、この遺構の最終埋没時期は13世紀前半ごろと思われる。

SK7 出土遺物 (I 87~I 97) I 87~I 95は、橙褐色を呈する土師器。I 87は1段撫で面取り手法の皿、I 88~I 90は1段撫で素縁手法の皿で、I 89はE₃類、I 90はE₄類。I 91~I 95は口径ほぼ9cmの受皿。I 96は軒丸瓦。内区は摩滅により不明瞭だが、蓮華文であろう。外区には珠文が巡る。I 97は瓦当面の上下幅が狭い剣頭文軒平瓦で、凹面の布目を撫で消す。KCH30I。このほか、「メ」字状の篋記号をもつ丸瓦が1点出土している。これらの遺物は、古代の瓦を含むものの、おおむね13~14世紀に位置づけられる。

SD7 出土遺物 (I 98~I 102) I 98・I 99は橙褐色を呈する土師器皿で、ともに1段撫で面取り手法。I 100は灰釉陶器の底部で、内面に釉が見られる。高台は貼り付け。I 101は単弁六葉蓮華文の軒丸瓦で、外区が一段窪み珠文をもたない。KCM11であろう。I 102は均整唐草文軒平瓦と思われるが、摩滅が著しい。平安後期と思われる遺物が日立つが、遺構の最終埋没年代は13世紀にまで下るようである。

SD8 出土遺物 (I 103・I 104) I 103は灰白色の土師器皿の底部で、円盤状高台に糸切痕をもつ。I 104は剣頭文軒平瓦。剣頭内の子葉が3本になるKCH30Bで、鎌倉時代のものであろう。

SH1 出土遺物 (I 105~I 108) I 105~I 107はいずれも珠文帯をもつ巴文軒丸瓦で、I 105・I 107は、右巴で外区圏線をもつKCM22Ba。I 108は剣頭文軒平瓦。中心飾りに右巴文を配するKCH30Ab。いずれも中世のものであろう。

SX1 出土遺物 (I 109~I 126) I 109~I 113は土師器皿。I 109~I 112は1段撫で素縁手法E₃類で、I 113は1段撫で面取り手法D₃類。I 109・I 110・I 112は橙褐色を呈

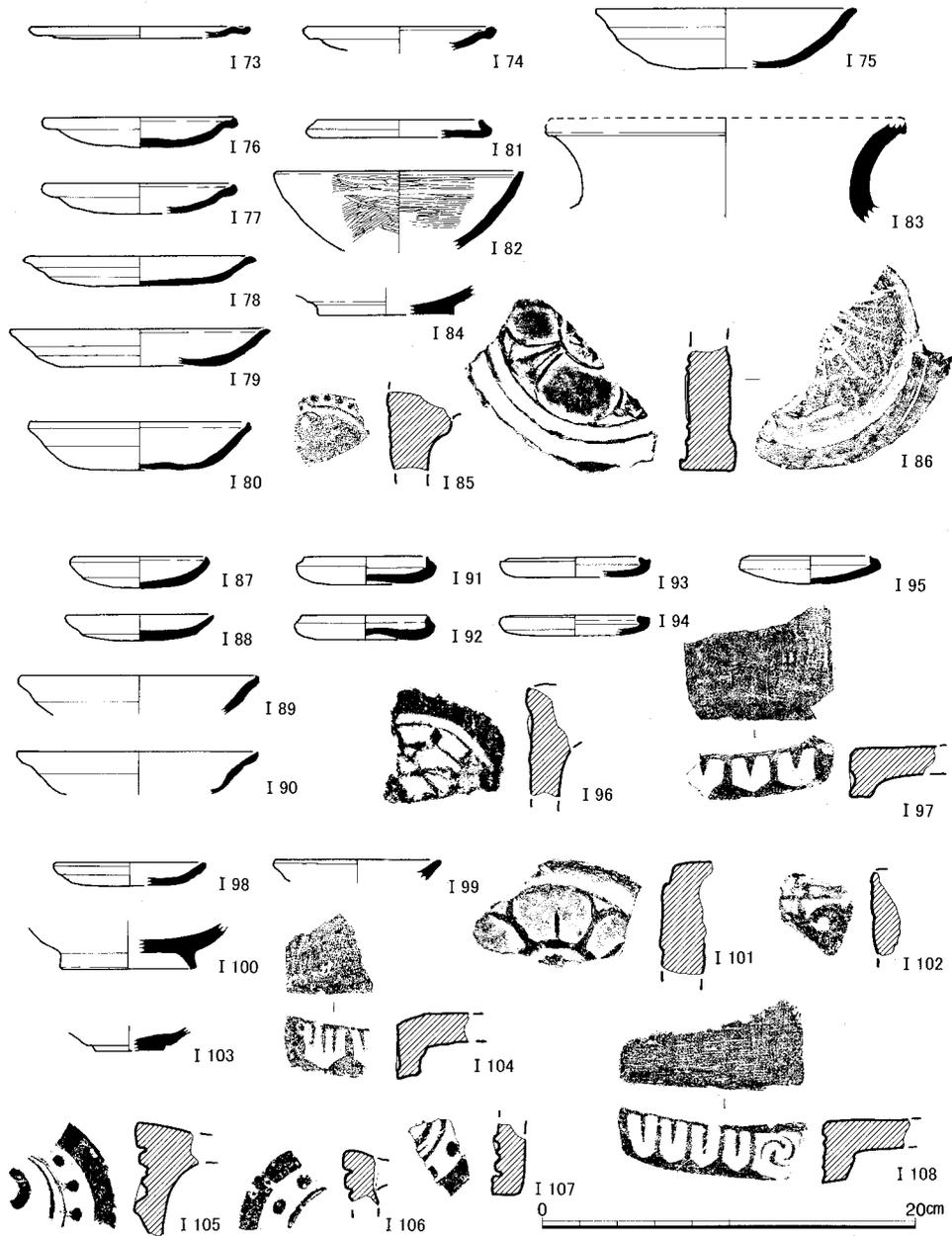


図9 SK3 出土遺物 (I 73~I 75土師器), SK11 出土遺物 (I 76~I 81土師器, I 82黒色土器, I 83・I 84須恵器, I 85・I 86軒丸瓦), SK7 出土遺物 (I 87~I 95土師器, I 96軒丸瓦, I 97軒平瓦), SD7 出土遺物 (I 98~I 99土師器, I 100灰釉系陶器, I 101軒丸瓦, I 102軒平瓦) SD8 出土遺物 (I 103土師器, I 104軒平瓦) SH1 出土遺物 (I 105~I 107軒丸瓦, I 108軒平瓦)

遺 物

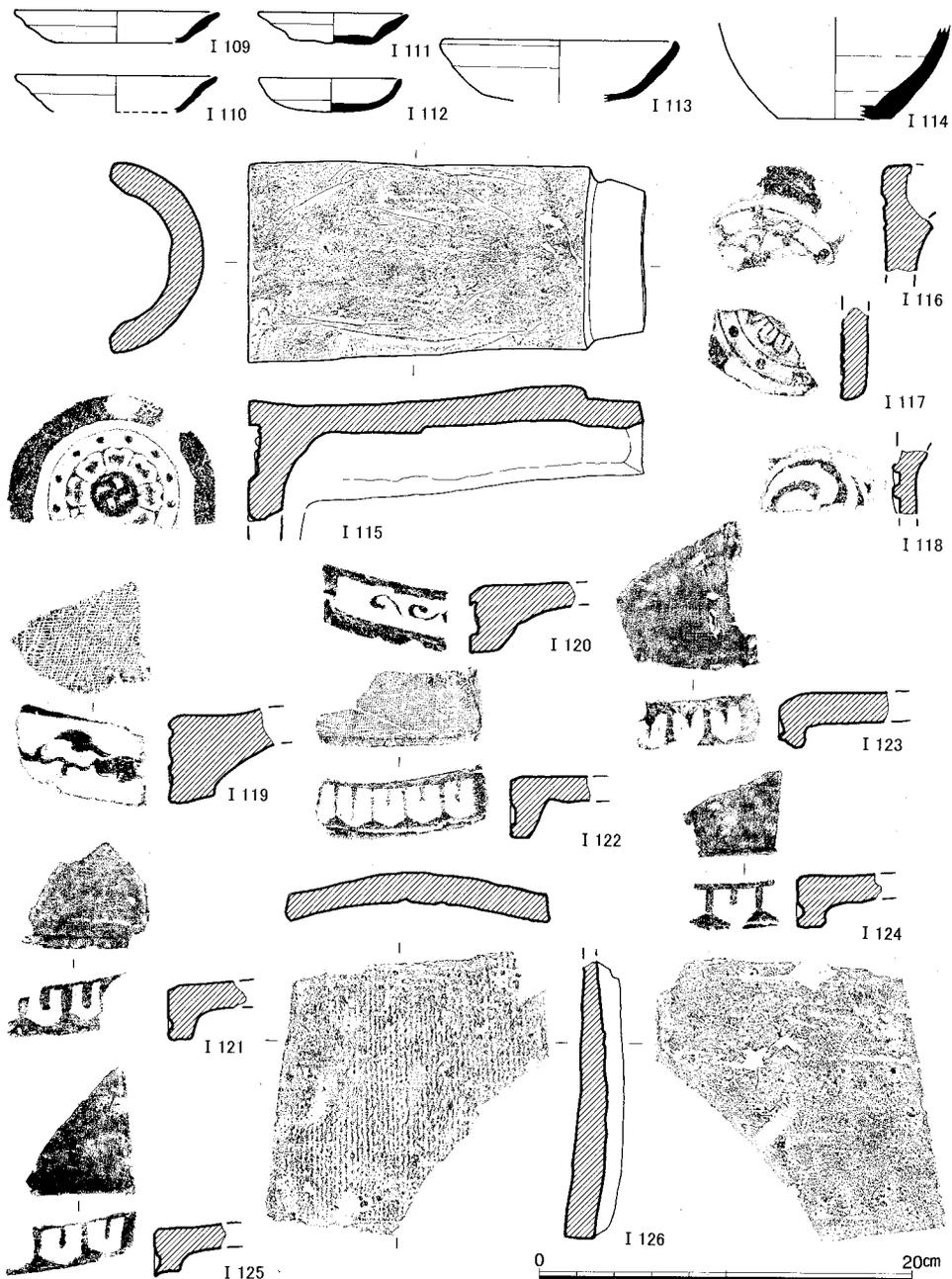


图10 SX1出土遺物 (I 109~I 113土師器, I 114陶器, I 115~I 118軒丸瓦, I 119~I 125軒平瓦, I 126平瓦)

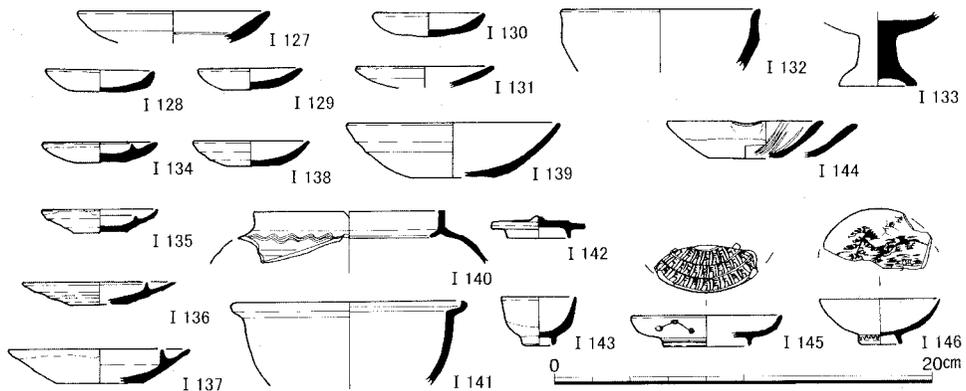


図11 SE2 出土遺物 (I 127～I 131土師器, I 132陶器, I 133磁器),
灰褐色土出土遺物 (I 134～I 144陶器, I 145・I 146磁器)

し, I 111・I 113は淡橙色を呈する。I 114は陶器壺の底部。信楽か。I 115～I 118は軒丸瓦。I 115は1段高い中房に卍文をもつ複弁八葉蓮華文でKCM20。I 116は内区に蓮華文をもつと思われるが不明瞭。I 117は複弁推定六葉蓮華文のKCM14。I 118は右巴文。I 119～I 125は軒平瓦。I 119・I 120は唐草文系統。前者は凹面の布目が粗い。後者は内区が幅狭で凹面を撫で消すKCH25。I 121～I 125は剣頭文の一群で, I 121は子葉の太く長いKCH30C。I 122は凹面の布目が細かく瓦当裏面にも布目が残る。KCH30Gbか。I 123～I 125は彫りが深く凹面の細かな布目が撫で消され凸面は縦方向の撫でとなるKCH30H。I 126は平瓦。これらは, 瓦に年代幅があるがおよそ中世後半の遺物である。

SE2 出土遺物 (I 127～I 133) I 127は灰白色を呈する土師器皿。見込みに細い圏線が巡る。I 128～I 131は淡橙色の土師器小皿。I 132は陶器碗。内外面とも鉄釉がかかる。I 133は磁器仏飯。これらの遺物は, 近世後半に比定されよう。

灰褐色土出土遺物 (I 134～I 146) I 134～I 144は陶器。I 134～I 137は灯明受皿で, I 138・I 139は灯明皿。いずれも外面露胎。内面は, I 136は灰白色, I 137は緑灰色, そのほかは黄灰色を呈する。I 140は土瓶の口縁部で, 内面は露胎。外面に薄い鉄釉を施し, 肩部に楡描波状文を巡らす。I 141は鍋。内外面ともに鉄釉を施す。I 142は垂下するかえりをもつ内面露胎の蓋。外面には灰褐色の釉を施す。I 143は京焼系の猪口。外面上半と内面に白化粧をしている。I 144はおろし皿。外面上部と口縁端部に鉄釉を施す。おろし目は4条1単位。I 145・I 146は染付。I 145は小皿で, くすんだ青色をしている。I 146は小杯。コバルト色を呈するので, 明治期まで下るかもしれない。

(3) 出土銭貨について (図版 6, 表 1・2)

今回の調査では総計149点の銭貨が出土した。うち、SK6 から元祐通寶 (1086年初鑄) 1点、灰褐色土中から寛永通寶 2点と銭種不明品 2点が出土したほかは、西調査区東壁際の落ち込み SX1 の埋土内からの出土が144点とほとんどを占める。これらは、SX1 のなかでも、北東部分を中心とする狭い範囲内に、ばらばらになりながらもまとまっていたこと、さらに、一部に数枚単位で銭縫の状態をとどめるものがみられたことから、後世の耕作による攪拌を被っているにせよ、本来何らかの形で意図的に埋納されたものである可能性が高い。中世の古銭資料については、京都大学構内遺跡においてはこれまで散発的な採集にとどまっており、今回の一括出土例はきわめて出色な事例である。よってここにその組成内容と計測データを呈示し、今後の比較検討に備えることにした。

表 1 には銭種の組成を示す。判明した銭種は24種類にわたるが、ほとんどが北宋銭であり、元祐通寶、皇宋通寶、熙寧元寶、元豊通寶、開元通寶、天聖元寶、の上位 6 種が半数近くを占める。これは、おおむね全国的な出土傾向に合致する [鈴木1992]。初鑄年代の最も下の資料は、南宋銭の淳祐元寶の1241年であるから、SX1 の年代はほぼ13世紀後半以降、と認定できることになる。これも貴重な情報といえよう。

表 2 には、破損や劣化などにより銭種が不明なものを除いた120点についての計測データを示す。計測は、おおむね兵庫埋蔵銭調査会の方式にしたがい、大きさについては、外縁外径を 2 箇所 (A・B)、外縁内径も 2 箇所 (C・D) の測点を求めている [永井編1994 第10図]。銭厚は 4 点を測定し、ここでは最大値と最小値を表示した。このほか電子天秤により重量も測定した。

遺存の良くない資料が多いので厳密な比較は難しいけれども、同一銭種で近似した法量でありながら、重量にはかなりの差異が認められる状況がみられることから、模鑄銭の可能性なども視野に入れながら、今後は化学的な成分分析を行っていく必要がある。

表 1 SX1 出土銭貨

銭文 (初鑄年)	点数	比率 (%)
開元通寶 (621)	9	6.3%
軋元重寶 (758)	1	0.7%
太平通寶 (976)	1	0.7%
至道元寶 (995)	2	1.4%
咸平元寶 (998)	6	4.2%
景德元寶 (1004)	3	2.1%
祥符元寶 (1009)	4	2.8%
祥符通寶 (1009)	1	0.7%
天禧通寶 (1017)	2	1.4%
天聖元寶 (1023)	9	6.3%
景祐元寶 (1034)	2	1.4%
皇宋通寶 (1038)	14	9.7%
嘉祐元寶 (1056)	1	0.7%
嘉祐通寶 (1056)	2	1.4%
治平元寶 (1064)	2	1.4%
熙寧元寶 (1068)	12	8.3%
元豊通寶 (1078)	12	8.3%
元祐通寶 (1086)	14	9.7%
紹聖元寶 (1094)	6	4.2%
元符通寶 (1098)	3	2.1%
聖宋元寶 (1101)	6	4.2%
政和通寶 (1111)	5	3.5%
慶元通寶 (1195)	2	1.4%
淳祐元寶 (1241)	1	0.7%
判読不能	24	16.7%
総計	144	100.0%

京都大学総合人間学部構内 AR24 区の発掘調査

表2 SX1 出土銭貨の計測

番号	銭種	初鑄書	A(mm)	B(mm)	C(mm)	D(mm)	厚さ(mm)	重(g)	備考
1	開元通寶	621	24.75	24.80	22.10	21.15	1.55-1.80	3.2	
2	開元通寶	621	24.60	24.70	20.15	20.00	1.55	3.4	
3	開元通寶	621	23.85	24.55	19.75	20.35	1.10-1.25	(1.7)	破損
4	開元通寶	621	24.60	24.65	21.20	21.25	1.20-1.45	3.0	
5	開元通寶	621	24.95	24.45	21.70	20.90	1.30-1.55	2.7	
6	開元通寶	621	25.10	25.10	20.60	21.00	1.45-1.55	(2.4)	周縁欠
7	開元通寶	621	24.75	25.05	20.65	20.90	1.35-1.70	3.9	背下月
8	開元通寶	621	24.75	24.10	20.35	20.35	0.90-1.10	(1.3)	1/4欠・破損
9	開元通寶	621	24.90	25.05	21.35	21.15	1.50-1.70	2.7	
10	乾元重寶	758	24.35	24.25	20.45	20.40	1.20-1.35	2.6	
11	太平通寶	976	24.70	24.70	18.95	19.20	1.10-1.30	2.6	
12	至道元寶	995 草	24.90	24.90	18.90	18.55	1.05-1.35	2.7	
13	至道元寶	995 草					1.15	(0.9)	2/3欠
14	咸平元寶	998	23.90	24.05	18.40	19.00	0.95-1.30	3.1	
15	咸平元寶	998	24.15	24.95	18.75	19.30	1.15-1.40	2.3	
16	咸平元寶	998	24.45	24.15	18.75	19.05	1.40-1.60	3.2	
17	咸平元寶	998	25.05	25.40	19.40	19.20	1.15-1.35	(1.7)	1/4欠・破損
18	咸平元寶	998	24.70		18.95	19.25	1.05-1.40	(1.9)	周縁欠・破損
19	咸平元寶	998	24.95	25.10	18.85	18.85	1.05-1.30	(2.4)	周縁欠・破損
20	景德元寶	1004	24.75	24.75	18.70	18.65	1.15-1.35	2.9	
21	景德元寶	1004		24.45		18.60	1.00-1.15	(2.0)	周縁欠
22	景德元寶	1004	24.95	24.80	18.10	19.30	1.35-1.55	3.1	
23	祥符通寶	1009	25.55	25.80	18.90	18.70	1.20-1.40	(3.5)	周縁欠・破損
24	祥符元寶	1009	25.45	25.35	18.80	18.80	1.20-1.35	3.8	
25	祥符元寶	1009		24.60	18.70	18.45	1.15-1.60	(2.3)	周縁欠
26	祥符元寶	1009	25.70	24.90	18.70	18.30	1.10-1.25	(2.2)	周縁欠・破損
27	祥符元寶	1009		25.10	18.30	18.25	1.10-1.25	(1.8)	1/4欠
28	天禧通寶	1017	25.25	25.75	20.55	20.75	1.10-1.20	2.7	
29	天禧通寶	1017		26.35	23.05	21.10	1.20-1.45	(2.2)	縁欠・破損
30	天聖元寶	1023 篆		24.85		21.05	0.95-1.05	(1.8)	周縁欠・破損
31	天聖元寶	1023	25.10	25.25	20.65	20.65	1.20-1.30	3.2	
32	天聖元寶	1023					1.10-1.35	(1.3)	1/2欠・破損
33	天聖元寶	1023	24.95	24.55	20.25	19.75	1.10-1.50	3.4	
34	天聖元寶	1023 篆		25.70		22.00	1.20-1.30	(2.2)	周縁欠・破損
35	天聖元寶	1023 篆					1.10-1.30	(1.4)	1/2欠
36	天聖元寶	1023		25.75		21.10	1.30-1.40	(2.4)	周縁欠・破損
37	天聖元寶	1023 篆	24.75	24.65	20.70	20.25	1.30-1.60	2.7	
38	天聖元寶	1023		24.60		20.70	1.30-1.35	(2.3)	1/4欠
39	景祐元寶	1034	25.25	24.60	21.85	21.90	1.30-1.35	(2.3)	周縁欠
40	景祐元寶	1034 篆	25.70	25.45	20.35	20.00	1.30-1.40	3.0	
41	皇宋通寶	1038 篆		25.85		21.55	1.25-1.30	(2.5)	周縁欠

遺 物

表2 つづき

番号	銭種	初鑄書	A(mm)	B(mm)	C(mm)	D(mm)	厚さ(mm)	重(g)	備考	
42	皇宋通寶	1038	25.75	25.60	20.35	20.25	1.30-1.50	3.4		
43	皇宋通寶	1038	23.70	24.50	18.90	19.20	1.00-1.10	3.0		
44	皇宋通寶	1038	24.60	24.55	19.80	20.25	1.50-1.70	3.3		
45	皇宋通寶	1038	24.25	24.25	20.35	20.00	1.00-1.20	(1.8)	周縁欠	
46	皇宋通寶	1038	25.00		21.10	21.55	1.15-1.75	(2.8)	周縁欠	
47	皇宋通寶	1038	24.80	25.35	20.15	19.35	0.95-1.20	3.3		
48	皇宋通寶	1038	25.35	25.35	21.30	21.45	1.00-1.20	3.6		
49	皇宋通寶	1038	24.20	24.25	19.70	19.75	1.30-1.55	2.9		
50	皇宋通寶	1038	篆	25.50	25.50	19.80	20.05	0.95-1.10	2.7	
51	皇宋通寶	1038	篆	24.65	25.45	19.80	20.40	1.25-1.45	3.0	
52	皇宋通寶	1038	篆	24.40	24.30	19.60	19.60	1.10-1.15	2.1	
53	皇宋通寶	1038	25.15	25.15	20.30	19.90	1.35-1.80	(3.1)	周縁欠	
54	嘉祐通寶	1056	篆	23.65	23.55	20.15	19.95	1.30-1.40	2.7	
55	嘉祐通寶	1056	篆	25.50	25.45	19.95	19.75	1.00-1.20	3.4	
56	嘉祐元寶	1056	24.20		19.55		1.30-1.70	(1.6)	1/4欠・破損	
57	治平元寶	1064	篆	24.30	24.25	19.30	19.50	1.40-1.50	4.2	
58	治平元寶	1064	篆	24.15	24.00	19.00	18.40	1.15-1.45	3.1	
59	熙寧元寶	1068			20.30	20.50	0.95-1.10	(2.2)	周縁欠	
60	熙寧元寶	1068	24.10	23.75	19.95	19.00	1.10-1.45	2.6		
61	熙寧元寶	1068	25.05	24.70	19.60	20.30	1.20-1.25	3.1		
62	熙寧元寶	1068	篆	24.05	23.95	19.95	19.30	1.05-1.35	(2.2)	
63	熙寧元寶	1068	篆	24.30	24.05	20.70	20.60	1.35-1.45	3.3	
64	熙寧元寶	1068	篆	23.40	23.95	19.90	20.10	1.10-1.60	(2.3)	周縁欠
65	熙寧元寶	1068	篆	22.90	23.85	18.85	20.25	1.20-1.55	2.6	
66	熙寧元寶	1068	23.60	23.80	19.05	18.95	1.25-1.35	2.4		
67	熙寧元寶	1068	篆	23.15	23.30	19.30	19.05	1.30-1.40	2.9	
68	熙寧元寶	1068	26.30	26.40	21.70	22.40	1.15-1.30	(2.0)	周縁欠・破損	
69	熙寧元寶	1068	篆	25.05	25.60	21.00	21.00	1.20-1.30	2.6	
70	熙寧元寶	1068	篆	25.10	25.00	19.55	19.85	1.25-1.45	(3.2)	破損
71	元豊通寶	1078	行	24.75	24.85	19.10	19.65	1.20-1.30	3.4	
72	元豊通寶	1078	行	25.40	25.25	19.60	19.60	1.35-1.40	4.0	
73	元豊通寶	1078	行	24.90	24.85	19.12	19.90	1.20-1.40	3.6	
74	元豊通寶	1078	行	24.20	24.30	18.10	18.15	1.30-1.55	3.7	
75	元豊通寶	1078	篆	24.00	24.25	18.75	18.95	1.05-1.30	2.9	
76	元豊通寶	1078	篆	24.35	24.55	19.55	19.25	1.20-1.40	2.8	
77	元豊通寶	1078	行	24.30	24.30	19.30	19.50	1.30-1.45	2.8	
78	元豊通寶	1078	篆	24.30		19.90	19.35	1.45-1.60	(2.8)	周縁欠
79	元豊通寶	1078	行		25.05	19.15	19.85	1.15-1.25	(2.4)	周縁欠
80	元豊通寶	1078	篆	25.45	25.65	21.70	21.15	1.15-1.20	2.6	
81	元豊通寶	1078	篆	24.75	24.85	19.70	20.20	1.70-1.80	(3.3)	周縁欠・破損
82	元豊通寶	1078	篆					1.30-1.40	(1.1)	2/3欠

京都大学総合人間学部構内 AR24 区の発掘調査

表2 つづき

番号	銭種	初鑄書	A(mm)	B(mm)	C(mm)	D(mm)	厚さ(mm)	重(g)	備考
83	元祐通寶	1086 篆	24.95	24.80	21.10	20.85	1.30-1.55	3.4	
84	元祐通寶	1086 篆	25.30	25.35		20.20	1.50-1.70	3.4	
85	元祐通寶	1086 行	24.30	23.90	19.00	19.75	1.05-1.15	2.2	
86	元祐通寶	1086 行		25.05	18.55	19.20	1.30-1.50	(2.6)	周縁欠
87	元祐通寶	1086 行	23.75	24.05	19.15	19.90	1.15-1.35	1.8	
88	元祐通寶	1086 行	23.30	23.65	18.85	18.80	1.20-1.50	2.9	
89	元祐通寶	1086 行	24.75	24.70	20.15	19.90	1.40-1.45	4.0	
90	元祐通寶	1086 篆	24.15	24.20	19.55	20.05	1.10-1.30	2.2	
91	元祐通寶	1086 行	24.50	24.70	19.50	19.50	1.30-1.45	4.0	
92	元祐通寶	1086 行					1.35-1.45	(1.0)	1/2欠
93	元祐通寶	1086 行					1.15-1.20	(1.4)	1/3欠・破損
94	元祐通寶	1086 行	24.90	24.10	19.85	20.20	1.30-1.45	2.0	周縁欠
95	元祐通寶	1086 篆	24.85	25.25	18.50	18.15	1.10-1.30	(2.2)	中央欠
96	元祐通寶	1086 篆	25.80	24.50	21.15	20.05	1.55-1.65	(3.1)	破損
97	紹聖元寶	1094 行	24.85	24.75	9.80	19.80	1.30-1.35	3.4	
98	紹聖元寶	1094 行	23.70	24.05	18.30	17.90	1.30-1.50	3.6	
99	紹聖元寶	1094 行	24.50	24.45	18.00	18.20	1.25-1.30	2.9	
100	紹聖元寶	1094 行	24.40	24.35	18.25	18.50	1.30-1.40	2.4	
101	紹聖元寶	1094 篆	24.10	24.20	19.20	18.90	1.25-1.40	2.6	
102	紹聖元寶	1094 行	24.15	24.20	19.50	20.10	1.65-1.75	3.9	
103	元符通寶	1098 行	24.80		20.30		1.45-1.55	(2.4)	周縁欠・破損
104	元符通寶	1098 行	24.75	25.00	19.80	20.25	1.30-1.35	2.6	
105	元符通寶	1098 篆	24.75	24.55	21.05	21.00	1.40-1.60	3.6	
106	聖宋元寶	1101 篆	24.00	24.15	20.15	20.15	1.45-1.50	3.5	
107	聖宋元寶	1101 篆	25.30	25.35	18.65	18.30	1.20-1.30	3.2	
108	聖宋元寶	1101 行	24.20	23.95	18.60	18.60	1.05-1.25	2.7	
109	聖宋元寶	1101 篆	24.20	24.65	20.00	19.65	1.25-1.50	3.6	
110	聖宋元寶	1101 篆	24.95	24.80	19.35	19.50	0.95-1.30	3.2	
111	聖宋元寶	1101 行		24.50		20.65	1.30-1.65	(2.7)	周縁欠
112	政和通寶	1111	24.45	23.30	20.10	20.10	1.30-1.45	3.3	
113	政和通寶	1111	24.75	25.00	20.45	20.70	1.30-1.50	3.9	
114	政和通寶	1111	24.10	24.25	21.95	22.10	1.60-1.75	2.9	
115	政和通寶	1111	24.75	24.60	20.60	20.25	0.95-1.05	2.1	
116	政和通寶	1111 篆	25.25	25.30	22.10	22.35	1.35-1.40	(2.2)	周縁欠・破損
117	慶元通寶	1195	24.90	25.15	20.15	20.55	1.45-1.60	3.8	背四
118	慶元通寶	1195	24.30	24.40	19.65	19.55	1.05-1.35	2.8	背六
119	淳祐元寶	1241	24.65	25.11	21.85	21.25	0.95-1.50	(2.3)	背二・周縁欠

書：使用書体，「行」→行書体，「草」→草書体，「篆」→篆書体，無記入は真書体ないし楷書体

5 小 結

今回の発掘調査では、小面積にもかかわらず重要な知見が得られた。ここで簡潔にまとめておきたい。

縄文・弥生時代の遺跡 前回調査と同様、今回も弥生時代前期新段階の土器が多数出土している。量的にみると、東調査区が圧倒的に多いものの、基本的に中世以降の包含層しか堆積していない西調査区においても、遺構が存在し一定量の土器の出土もみている点は、調査区一帯がその時期に広範に利用対象となっていたことを示す成果として注目される。土器の器種組成についてみると、壺と甕の双方が偏ることなく出土しており、また遺存状態も良好なおおぶりの破片が多いことから、近接してひろがる居住域で使用されたものの廃棄であることを示唆している。今後、周辺の調査においては住居跡や貯蔵穴など遺構の存在に十分注意を払う必要がある。また、少量ではあるが出土している縄文晩期滋賀里Ⅲb式の土器片についても、いずれも磨滅しておらず、この時期の遺跡のひろがりについても今後留意しておかねばならないだろう。

古代の遺跡 奈良・平安時代とも少量の遺構と遺物しか出土していないため、これらの時代の遺跡像を語ることはむづかしい。そのなかで注意しておきたいのは、東調査区において一定量出土している奈良時代の遺構と遺物である。前回調査においても、とくに東半を中心にこの時代の遺構と遺物が一定量確認されているため、今回もそのひろがりが見られるものとみられる。北東約200mのAT27区で同時期の竪穴住居2棟が見つかることも考慮すると、おおむね本部構内中央から総合人間学部構内北辺にかけての微高地上が、この時代の遺跡の中心的範囲であったと想定できる。平安京遷都以前の山城北部地域の古代遺跡は非常に資料が乏しいため、今後の調査で貴重な情報が得られるものと期待される。

なお、前回調査では埴輪などの古墳時代遺物が出土し、周辺に古墳や集落の存在も期待されたが、今回全くそれらは認められなかった。

中世の遺跡 今回は、西調査区において、掘立柱建物跡SH1や、多量の銭貨が出土した落ち込みSX1などがみつき、遺跡の内容を具体的に知るために重要な情報を追加することができた。厳密な時期的平行関係は今後さらに検証を積み重ねる必要があるけれども、前回調査で確認された濠状の大溝に囲まれた内部に、掘立柱建物が存在していたことを示す成果が得られたとみて良からう。ただし、柱穴の径は小さく、礎石も持たないこ

とから、小規模で簡便な構造の建物であった可能性が高い。近接して特殊な性格をうかがわせる落ち込み SX1 が存在することと、瓦類の出土量の多さに比して日常雑器類の出土量が少ない、といった状況を考慮すると、一帯は通年的な居住生活にかかわる屋敷地というよりも、ある程度宗教的な機能を果たしていた空間であり、この建物もそれに関係するものであったと想定しておく方が妥当と考える。また、今回や前回の調査地一帯では、本部構内や医学部構内などで頻繁にみられるような土師器皿の大量廃棄遺構は存在しないことも、それらの地区の中世遺跡とは性格を異にするものであったといえるだろう。前回調査の報告に際しては、勤修寺流吉田氏の浄蓮華院と吉田社関連のふたつを候補として掲げたけれども、現段階ではまだ結論を下すことは難しい。今後のさらなる資料の蓄積や他地区との比較によって、より確実な判断を行うことにしたい。

近世の遺跡 西調査区で耕作関連の柱穴群と野壺が見つかったているが、東調査区では包含層そのものが削平されてしまっており、遺物もごく少量しか出土しなかった。中世末以降調査地一帯は耕地化しており、この時代の居住の中心は、東調査区よりもさらに東方、現在の吉田二本松町を中心とする市街地と重複しているであろう。